

技能競技大会を活用した 人材育成の取組マニュアル

和裁職種編



はじめに

技能五輪全国大会をはじめとする技能競技大会は、国内の青年技能者の技能レベルを競うことにより、青年技能者に努力目標を与えるとともに、技能に身近に触れる機会を提供するなど、広く国民一般に対して、技能の重要性、必要性をアピールし、技能尊重気運の醸成を図ることを目的として実施されており、近年参加選手数が増加傾向にあるなど、活性化を見せています。

この理由として、技能競技大会が単に技能レベルを競い合う大会であるだけでなく、大会参加に向けた訓練を通じて技能レベルはもとより、段取り構成力、応用力、判断力、忍耐力など、技能者として必要な人格形成にも大きな影響を及ぼし、将来、ものづくり立国日本を支え、日本のマザー工場機能を維持するのに必要な中核技能者の育成に大きな役割を果たしていることが挙げられます。

しかしながら、技能競技大会に出場するには各都道府県で開催される地方予選を勝ち抜き、決められた大会会場に集まる必要があるため、会場から遠方の企業や、訓練方法のノウハウを持たない企業にとってはハードルが高いことは否めません。

このため厚生労働省では、「ものづくりマイスター」が企業、職業訓練施設、工業高校等の若年者に対して、技能競技大会の競技課題等を活用した実技指導等を行うことにより、若年技能者を育成する新しい事業を創設しました。

「技能競技大会を活用した人材育成の取組マニュアル」は、「ものづくりマイスター」はもとより、企業、職業訓練施設、工業高校等の関係者が、技能競技大会の競技課題等を活用した人材育成等を理解し、訓練計画の策定、実技指導等を行う際に使用されることを想定して作られており、製造、建設業関係の職種について、職種共通編及び職種別編の2種類から構成されています。

職種共通編では、①技能競技大会の競技課題等を活用した訓練の特徴及び人材育成の効果、②技能競技大会の競技課題等を活用した訓練の取組方法の概要、③技能競技大会及び技能検定の実技課題の入手方法などが説明されています。

職種別編では、①競技課題の概要、②競技課題が求める技能の内容、③採点基準、④技能習得のための訓練方法、⑤課題の実施方法（作業手順）、⑥期待される取組の成果などを説明しています。

これらのマニュアルのほかに、技能競技大会の競技課題等を活用した訓練による人材育成の具体的な取組について、企業、教育訓練機関での事例を紹介した「好事例集」も作成されています。そちらも参考としてください。

最後に、ご多忙の中、本マニュアル作成にご協力いただいた次の方々に心から感謝申し上げます。

中山 好男（一般社団法人 全国和裁着装団体連合会） 手島 明彦（一般社団法人 日本和裁士会）
佐藤 孝子（一般社団法人 全国和裁着装団体連合会） 鈴木 章義（一般社団法人 日本和裁士会）
鈴木 榮治（一般社団法人 全国和裁着装団体連合会） 大森 貴之（一般社団法人 日本和裁士会）

（敬称略、順不同）

【実演協力】

有限会社足立和裁研究所

目次

| | | |
|----------|---|----|
| 1 | このマニュアルの使い方 | 1 |
| 2 | 和裁職種に求められる技能 | 2 |
| 3 | 競技課題の概要 | 3 |
| | (1) 材料、使用工具等 / (2) 課題条件 / (3) 製作物 / (4) 大会の様子 | |
| 4 | 競技課題が求める技能の内容 | 6 |
| | (1) 地直し・地詰め / (2) 裁断 / (3) 標付け / (4) 縫製 / (5) 仕上げ | |
| 5 | 採点基準 | 9 |
| | (1) 採点項目及び配点 / (2) 採点方法 / (3) 大会の成績結果 | |
| 6 | 技能習得のための訓練方法 | 12 |
| | (1) 課題で必要になる技能要素 / (2) 訓練のポイント / (3) 課題への対応 / (4) 制限時間内に仕上げるためには / (5) 技能要素取得カリキュラムの例 / (6) 訓練・指導の例 | |
| 7 | 課題の実施方法（作業手順） | 14 |
| | (1) 準備 / (2) 地直し・地詰め / (3) 裁断 / (4) 標付け / (5) 縫製 / (6) 仕上げ | |
| 8 | 期待される取組の成果 | 76 |

巻末資料

第51回技能五輪全国大会「和裁」職種 競技課題等一式



1 このマニュアルの使い方

この職種別マニュアルには、技能五輪全国大会の競技課題や採点基準（公開が可能な部分）の他、競技課題の具体的な実施方法（作業手順）や競技課題を通して培った技能を現業でどのように役立てるかのヒントとなる事例等を記載している。

特に、「課題の実施方法（作業手順）」については、課題作製の作業手順を写真や解説で紹介し、現場でスムーズな実技指導が行えるよう配慮している。しかしながら、そもそも技能五輪全国大会の競技課題は、技能検定1級レベルの技能を必要とするだけでなく、多くの技能要素を含んでいること、限られた時間内で完成させなければならないこと等から、受講者によっては、短時間・短期間の訓練で課題全てを完成させることは難しいと考える。

本マニュアルの利用にあたっては、訓練時間・訓練期間等を考慮の上、受講者の技能レベルに合わせて必要な箇所（特定の作業や一部部品の作業手順等）を利用されることをお勧めする。

本マニュアルを参照し、若年者に技能を身につけさせる指針として活用願いたい。

次ページ以降の各項目の記載内容の概要は以下のとおり。

| 項目 | 概要 |
|-----------------|--|
| 2 和裁職種に求められる技能 | 競技に限らず、和裁職種に携わる技能者が実務上必要となる技能について、一般論を記載。 |
| 3 競技課題の概要 | 本マニュアルで取り上げる競技課題の概要。競技では、何を材料に、何（課題条件）を手がかりにして、何（製作物）を作るのかについて掲載。 |
| 4 競技課題が求める技能の内容 | 作業手順を勘案しつつ、競技課題が求めている具体的な技能の内容（要素）について列挙するとともに、それぞれについて求められる技能レベルについて掲載。また、競技課題を制限時間内に仕上げるポイント、参加者・指導者のコメント等を紹介。 |
| 5 採点基準 | どこを採点対象とするのか等、採点基準や評価方法について、今後の大会運営に支障を来さない範囲で掲載。合わせて実際の大会結果についても掲載する。 |
| 6 技能習得のための訓練方法 | 先に記述した技能要素を習得するための訓練方法の一例について掲載。 |
| 7 課題の実施方法（作業手順） | 技能五輪で優秀な成績を収めた企業等の事例。技能のポイント、具体的な課題作製の手順、取組・作業のポイント等を紹介。 |
| 8 期待される取組の成果 | 技能五輪で優秀な成績を収めた企業等の事例。競技課題を用いた訓練等を行う目的や期待する成果等について紹介。 |

2 和裁職種に求められる技能

和服は、茶道、華道、舞踊などの日本の伝統文化に不可欠で、現代でも多くの日本人に親しまれる一方、世界でも注目を集めている。布地の材質や染色、加工の仕方によって様々な風合いや色、柄が作られ、普段着から訪問着、礼装着まで種類も多く、直線的な裁断・縫製なのに多様な美が表現されるのが特徴である。

「和裁」は、日本の伝統衣装の和服を仕立てる職種であり、染織された布を裁断し、直線的に縫製することによって優美な「きもの」に仕上げる技能である。日常の中に息づく日本文化として、これからも「和裁」の技能は継承される。

和裁に求められる技能として、大きく4つに大別される。

(1) 採寸

着物は、衿・身頃・袖・衿の縫い合わせでできているので、身長、身丈（着丈）、衿丈、袖丈、袖幅、前幅、後幅の寸法を正確に測る。

(2) 裁断

和裁には型紙がない。袖・身頃・衿・衿の部分見積りして、反物を裁断していく。

裁断には、無地や小紋、付下げや留袖などの絵羽物等に違いがある。縮緬（ちりめん）などのような地の目を真っ直ぐに通すもの、通せないもの、いろいろな裁ち方がある。裁断には本裁ち、中裁ち、小裁ちがあり、各裁断には細心の注意を要する。

(3) 縫製

生地と生地とのバランス、仕立て方法によって仕上がりは大きく変わる。布地によって、針目、糸の加減やコテの当て方に微妙な違いがあり、特に袷着物の場合、裏とのつり合いをよく考えて縫うことが重要である。直線縫いは縫い目が真っ直ぐに同じ間隔で、袖の丸みは型のとおり、標に忠実に正確に縫っていく。きれいに仕上げるため、和裁独特の縫い方の習得が必要。

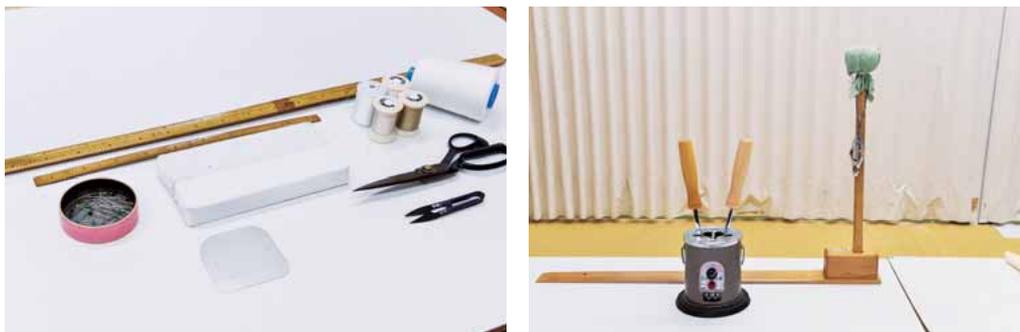
(4) 仕上げ

袖の丸みを作ったり、縫い目のシワを取っていくなど仕上げに必要なコテの当て方がある。

また、生地の種類によって、適した仕上げ方法がある。例えば、木綿、麻は霧仕上げ、絹布、合繊類、交織物はアイロンをメインとした仕上げなどである。

3 競技課題の概要

(1) 材料、使用工具等



- ・針、糸、はさみ、ものさし、ヘラ、断ち台など
- ・コテ、針山、くけ台、懸張器（かけはりき）など

(2) 課題条件

公開されている第51回技能五輪全国大会競技課題を巻末に示す。

競技は、課題を9時間で行う。

仕立て寸法（尺は鯨尺（1尺 = 25/66m）を使用）

身丈・・・背から4尺2寸（159.1cm）

袖丈・・・1尺3寸（49.2cm）

衿・・・1尺7寸5分（66.3cm）

袖幅・・・9寸（34.1cm）

袖付・・・6寸（22.7cm）

袖口・・・6寸（22.7cm）

後ろ幅・・・8寸（30.3cm）

前幅・・・6寸5分（24.6cm）

抱幅・・・6寸5分（24.6cm）

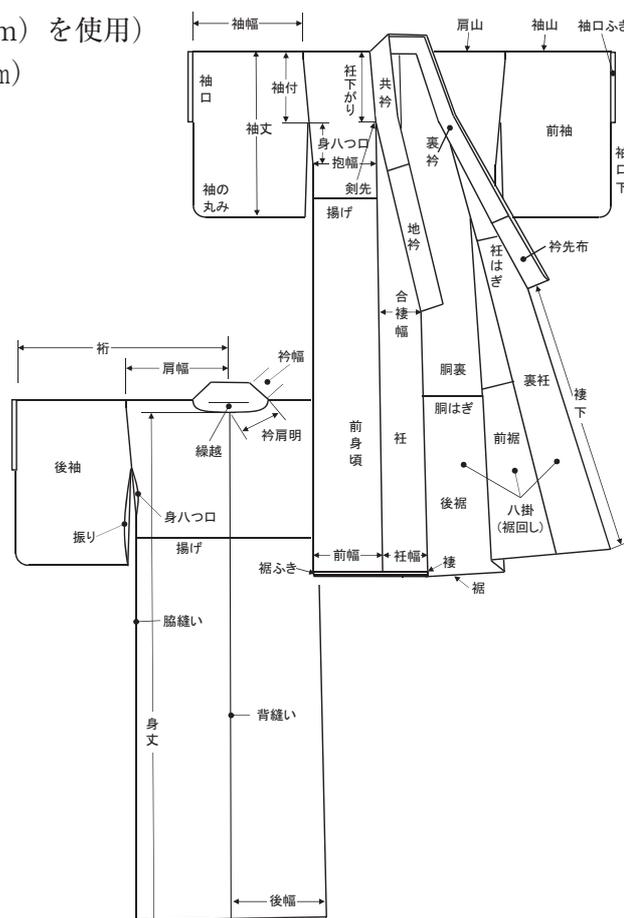
衿幅・・・4寸（15.2cm）

合襷幅・・・3寸8分（14.4cm）

繰越・・・5分（1.9cm）

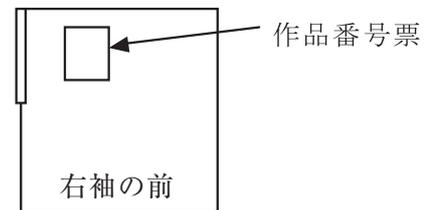
袷下・・・2尺1寸（79.5cm）

その他の寸法は標準寸法に準ずる。



仕様

- ① 特殊加工（ガード加工等）はしないこと。
- ② すべての箇所についての幅の標付け（ヘラ・チャコ等）、折りはしてきてはいけない。ただし、表、裏の衽は自由とする。
- ③ 事前に縫い上げておく箇所は、次のとおりとする。
右袖。衽先布と裏衽のこはぎ。裏は胴裏、八掛（裾回し）胴はぎまで。
- ④ 競技会場で行うものは、次のとおりとする。
左袖と表身頃、裏身頃前幅の標付け（ヘラ付け）をし、衽付けから仕上がりまで。
- ⑤ 衽は、表裏別縫いとし、衽先は本留めとすること。ただし、衽先縫い代を表裏の衽ではさむ。
- ⑥ 共衽は、別がけとする。ただし、くけは東ぐけでもよい。
- ⑦ 袖口布は、回しがけとする。
- ⑧ 共衽及び裾下（衽下）のしつけは、してきてはならない。
- ⑨ しつけの種類は自由とする。
- ⑩ 三つ衽芯の長さは8寸（30cm）以内とする。
- ⑪ 競技終了後のおもしはしてはいけない。
- ⑫ 作品番号票は、図に示す位置に取れないように縫い付けること。ただし、縫い付ける時間は競技時間外とする。
- ⑬ 材料は表地小紋・八掛（裾回し）・胴裏とする。
- ⑭ 前後に内揚げを作る。



(3) 製作物

女物袴（あわせ）長着



前



後

(4) 大会の様子

**競技選手の感想**

鳥山選手……会場が広く、同世代の人たちが他の職種で競っているのを見て刺激になった。私もがんばろうと思い、周囲を気にせずに競技に集中できた。

村田選手……同世代の人たちだが、同世代の人には負けないと思いながら、見られていることで、緊張して糸が絡まる回数が多かった。

4 競技課題が求める技能の内容

競技は、女物袴（あわせ）長着を縫製し、その技を競う。同一の生地を使用し、一部縫製を事前に行い、会場で完成させる。ポイントは、厚さや伸びの違う生地を微妙なつり合いで縫い合わせるところにあり、各選手の技能差が最も出る課題である。

本課題を実施するにあたって必要となる特徴的な技能は、次のとおりである。

(1) 地直し・地詰め

布地の織り方や、織糸のバランスをチェックして、着くずれや、縫い狂いをなくすこと。繊維の中には、熱や湿気によって伸び縮みするものがあるので、地直しをする際は、繊維の特徴を知ることが必要である。

(2) 裁断

材料の布地を細心の注意をはらって、正確に裁断する技能。

(3) 標付け

裁断した生地に、縫い合わせを正確に行うため、袖・身頃・衿・衿・胴裏・八掛（裾回し）に標を入れる技能。標付けの正確さが美しい仕上がりにつながる。

(4) 縫製

縫い目が真っ直ぐになるように、同じ間隔で正確に縫っていく。厚さや伸びの違う表地と裏地を微妙なつり合いで縫い合わせる技能。袖の丸みはコテを使いながら美しく作る。

[1] 袖

- | | | | |
|---------|---------|----------|---------|
| ① 袖口布掛け | ② 袖口合わせ | ③ 袖口四つ留め | ④ 袖口下 |
| ⑤ 袖下 | ⑥ 袖のしつけ | ⑦ 袖口仕上げ | ⑧ 袖幅標付け |
| ⑨ 振り縫い | ⑩ 袖仕上げ | | |

[2] 表身頃

- | | | | |
|------------|----------|--------|-------|
| ① 内揚げ・背縫い | ② 後ろ幅標付け | ③ 脇縫い | ④ 衿付け |
| ⑤ 衿肩明き・衿付け | ⑥ 共衿付け | ⑦ 衿仕上げ | |

[3] 裏身頃

- | | | | |
|------------|--------|--------|--|
| ① 裏前身頃幅標付け | ② 裏衿付け | ③ 裏衿付け | |
|------------|--------|--------|--|

[4] 裾合わせ

- | | | | |
|--------|---------|-------|--|
| ① 裾合わせ | ② 裾のしつけ | ③ 裾とじ | |
|--------|---------|-------|--|

[5] 中とじ

- | | | | |
|-------|--------------|-------|-------|
| ① 背とじ | ② 身八つ口の留めと縫い | ③ 脇とじ | ④ 衿とじ |
|-------|--------------|-------|-------|

[6] 衿先留め

[7] 裾下くけ

[8] 袖付け

- | | | | |
|-----------|-------|---------|--|
| ① 袖付けの留め方 | ② 袖付け | ③ 袖の仕上げ | |
|-----------|-------|---------|--|

[9] 全体のつり合い確認

[10] 衿とじ、くけ

- | | | | |
|-------|----------|-------|--------|
| ① 衿とじ | ② 三つ襟芯始末 | ③ 衿くけ | ④ 衿仕上げ |
|-------|----------|-------|--------|

(5) 仕上げ

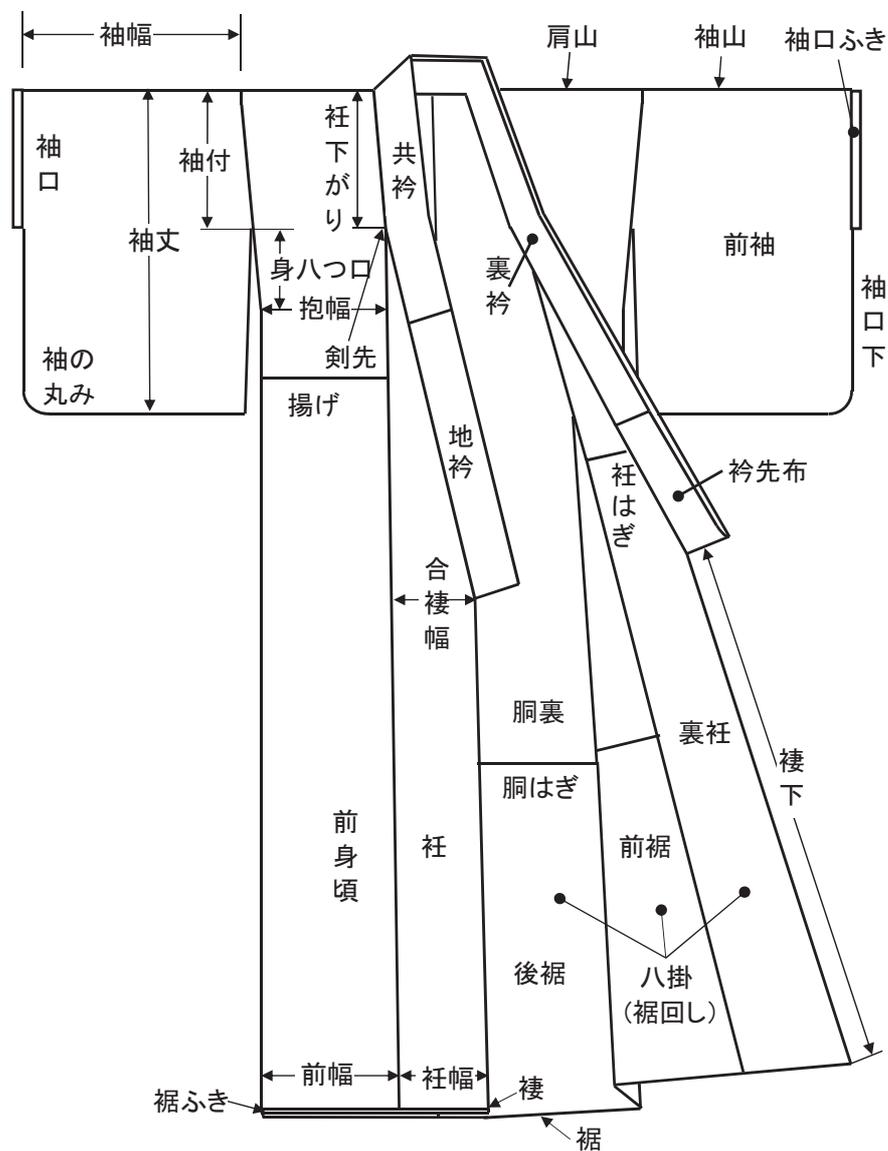
全体の縫い目及びキセが正しくコテで生地合った仕上げをする。

コテはアタリ（テカリが出てしまう状態）や焼けこげが出ないように当て布を使って仕上げる。

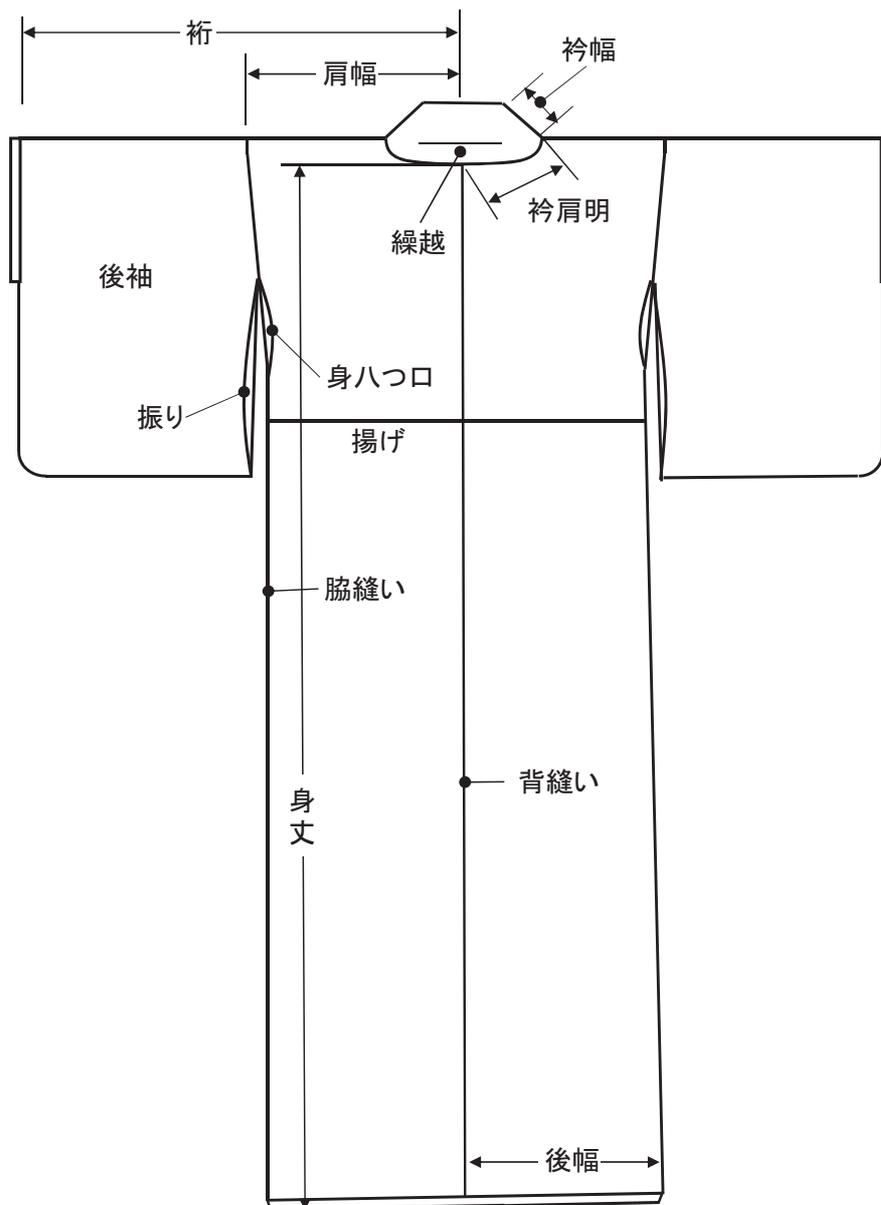
最終仕上げとして、縫い針が着物に残っていないか、寸法に誤りがないか、しみなどがないか、入念に確認する。

【女物袷長着各名称】

前



後



5 採点基準

(1) 採点項目及び配点

以下に示す方法により採点を行う。なお、技能五輪全国大会の採点基準については、競技課題の中の採点要領で、その採点項目と内容が示されているが、具体的な配点や、採点基準は公開されていない。

① 採点項目等

| 採点項目配点 | | 配点 |
|--------|------|-----|
| 作品採点 | 仕様誤り | 100 |
| | できばえ | |
| 作業態度 | | |

② 採点項目別着眼点

- 袖口・口下・丸み
- 袖丈・袖幅・振り
- 袖付け・身八つ口・衿のつり合い
- 表・裏直線縫い 身幅のつり合い
- 身頃の立てとじ かぶり
- 裓・裾ふき
- 裓下
- 表衿付け・共衿付け
- 裏衿付け・衿とじ
- 衿くけ・衿先
- コテ光り・焼けこげ・しみ 等

③ 仕様誤り

競技課題の課題条件仕様に準ずる。

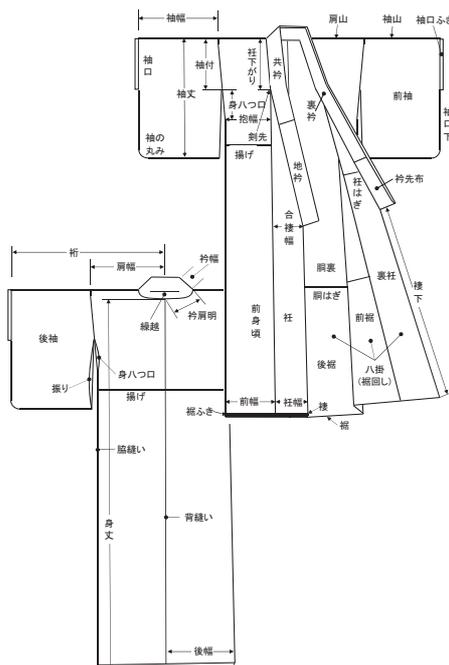
④ 採点方式

- 減点方式
- 未成品は採点しない。(競技時間内に完成した作品のみ採点。)

(2) 採点方法

具体的な配点、採点方法、採点箇所、採点基準（どれだけの誤差に対し何点の減点、またそれぞれの項目の重み付けなど）については公開されていない。そのため、本マニュアルのために採点基準を作成した。

| 大会での成績 | 内容 | 採点 |
|---------------------------|---------------------|-----|
| 1. 競技課題採点（袖、身頃、衿） | 袖口・口下・丸み | 10 |
| | 袖丈・袖幅・振り | 10 |
| | 袖付け・身八つ口・衿の つり合い | 10 |
| | 表・裏直線縫い、身幅の つり合い | 10 |
| | 身頃の立てとじ、かぶり | 10 |
| | 袷・裾ぶき | 10 |
| | 袷下 | 10 |
| | 表衿付け・共衿付け | 10 |
| | 裏衿付け・衿とじ | 10 |
| | 衿くけ・衿先 | 10 |
| 小計 | 100 | |
| 2. 作業態度（競技態度、不安全作業）、仕様の誤り | コテ光り・焼けこげ・ しみ 等 | 各△5 |
| 合計 | | 100 |



※競技内容は10段階の加点法で評価する。作業の態度、仕様の誤りの採点は減点法を採用する。

| 10段階評価 | | | | | | | | | |
|--------|------|---------|------|------|----|---------|-----|-------|------|
| 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 完璧 | 大変良い | 良い | やや良い | まあまあ | 普通 | いま一歩 | 不十分 | 悪い | 大変悪い |
| 優れている | | やや優れている | | ふつう | | やや劣っている | | 劣っている | |

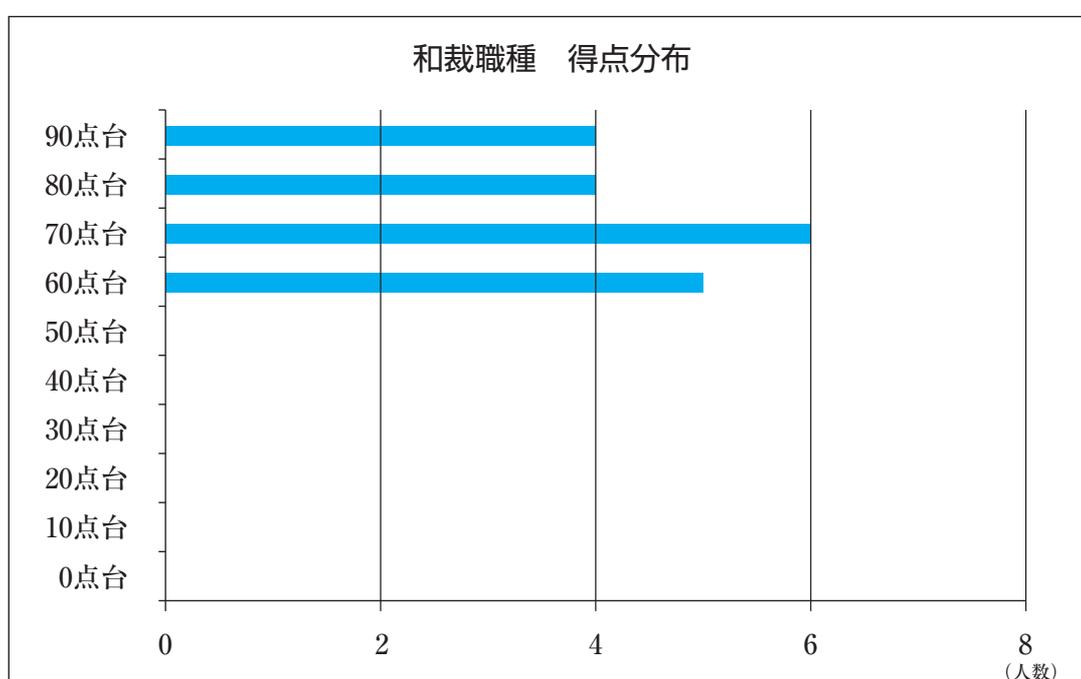
(3) 大会の成績結果

第51回技能五輪全国大会における競技結果の成績と得点分布を参考までに示す。

(成績)

| 大会での成績 | 人数 (名) |
|--------|--------|
| 金 賞 | 1 |
| 銀 賞 | 3 |
| 銅 賞 | 3 |
| 敢闘賞 | 2 |

(得点分布)



6 技能習得のための訓練方法

競技課題を適切に実施するには、和裁による作業方法及び各技能要素についてレベルアップした上で、課題対策を行っていくことが必要となる。

(1) 課題で必要になる技能要素

- ① 裁断
- ② 標付け
- ③ 縫製
- ④ 仕上げ

(2) 訓練のポイント

課題を十分に認識させた上で、参加者の性格及びポイントの技能レベルをしっかりと把握させ、十分な指導を行う。

(3) 課題への対応

- ① 採寸、標付けの正確さ
着物は、衿・身頃・袖、衿の縫い合わせでできているので、各丈、幅の寸法、標付けを正確に行う。
- ② 裁断の習得
裁断には、無地や小紋、付下げや留袖などの絵羽物等により、手順やはさみの使い方、各裁断の裁ち方が変わるので注意が必要。
- ③ 和裁独特の縫製の習得
生地と生地とのバランス、でき上がりの良さ、仕立てによって仕上がりは大きく変わる。布地によって、針目、糸の加減に微妙な違いがあり、特に袷着物の場合、裏とのつり合いをよく考える。
- ④ 仕上げに必要なコテのあてかた技能

(4) 制限時間内に仕上げるためには

時間内で終わらせるために、課題に沿った工程表を決める。課題内容によって工程ごとに時間を細かく決めていく。そして決められた時間に沿って訓練をしている。それによって最後に時間を余らせる。トラブルの無い前提で訓練しているが、万が一トラブルが発生したときには余った時間で対処している。

(5) 技能要素取得カリキュラムの例

一定水準にある技能者(技能検定2級相当)が本課題の実施に向けて取り組む訓練カリキュラムの例を示す。(着物10着程度縫ったときの時間を記載)

| 教科の細目 | 内容 | 時間 |
|-----------------------|--------------------------------------|------|
| 1. 競技課題の概要 | 課題の材料、工程等の作成、把握 | 5H |
| 2. 裁断 | 採寸から袖、身頃、衿、衿の裁断、縫い代の取り方 | 20H |
| 3. 標付け | 袖、身頃、衿、衿の標付け | 25H |
| 4. 縫製 | 手縫い、糸の留め方、結び方、縫い合わせ方、糸のつぎ方、くけ方、しつけ | 90H |
| 5. 仕上げ | コテ掛け | 20H |
| 6. 競技課題への取組 | (1) 課題が求めている技能要素 (2) 各工程の考え方と作業手順 | 2H |
| 7. 課題実施演習による 検証と対策 | | 2H |
| 8. まとめ | 全体的な講評及び確認・評価 | 2H |
| 訓練時間計 | | 166H |

(6) 訓練・指導の例

普段の訓練では、運針から始まり採寸、裁断、標付け、縫製、仕上げの技能を習得しつつ、ゆかた、襦袢、袴、コート、舞台衣装や舞妓の衣裳までの高度な和裁技術を指導している。

競技課題に合わせた訓練は特段行っていない。運針など基礎をしっかり身につけ、実習の積み重ねによって腕に覚えさせることが大切であると考えている。また、家庭的な雰囲気の中で日々、技術の研鑽に努めているので、教師と上級生が一体となって懇切丁寧な個人指導を行い、楽しみながら知識と技術の向上が図れるようにしている。

競技課題発表から実際の競技までの約3か月間は、競技時間である9時間内の作業時間配分に気を配るようにしている。課題発表前の訓練として、前年の課題に対して、前準備して作業時間を計ったり、縫製技能の指導をしたりしている。受賞した選手が自分の経験をもとに次の選手に指導し、指導の中で先輩の技能を間近に見ることで後輩が自分の習得した技能レベルを知り、さらに大会での技能レベルと自分を比較することができ、受賞できる自信に結びついている。

訓練には根気と集中力が大いに必要なので、それぞれの個人の資質に合わせた時間配分などにも気を遣って指導している。

7 課題の実施方法（作業手順）

(1) 準備

事前に縫い上げておく箇所は、次のとおり。

- ・ 右袖
- ・ 衿先布と裏衿のこはぎ
- ・ 裏は胴裏、裾回し（八掛け）胴はぎ

幅の標付け（ヘラ・チャコ等）、折りはしてきてはいけないが、表、裏の衿の標は付けてもよい。

① 競技前日までの作業



(←) 右袖

衿先布（↓）と裏衿のこはぎ（→）



(←) 裏は胴裏、八掛
(裾回し) 胴はぎ

② 道具、おもし、糸など



和裁で使う道具は、針、糸、はさみ、ものさし、ヘラ、断ち台、おもしなど。



コテ、針山、くけ台、懸張器。

(2) 地直し・地詰め (競技前日に作業)



技能ポイント

地直しを行う際、生地がどのような狂い方、曲り方をしているのかを見極め、繊維の種類などによって、どのような用具を使うのか、どのように直すのか、を決定する。繊維の中には、熱や湿気によって伸び縮みするものがあるので、地直しをする際は、繊維の特徴を知っておく。



地の目を見てアイロンを掛けていく。

POINT

地直しは、ただしわを伸ばす作業ではなく、生地をしっかり詰めることが大事。これを怠ると、丈が詰まったり、裕の表と裏とのつり合いが悪くなる。



一方向にアイロンを進め、真ん中を詰めて端を伸ばす。



(3) 裁断 (競技前日に作業)



技能ポイント

表地、裏地の裁断は細心の注意をはらって正確に裁つ。裁ち板からはさみを離さないで、垂直に立てて裁断していく。

はさみで裁断する場合、生地地の目（横）を通す。

[1] 生地裁断

仕立て寸法 (尺は鯨尺を使用)

| パーツ | 寸法 | 備考 |
|------|------------------|--------------------------------|
| 身丈 | 背から4尺2寸(159.1cm) | |
| 袖丈 | 1尺3寸(49.2cm) | 裁切袖丈 = 袖丈 + 縫い代2~4cm |
| 衿 | 1尺7寸5分(66.3cm) | 袖幅 + 肩幅 = 衿 |
| 肩幅 | 8寸5分(32.2cm) | |
| 後幅 | 8寸(30.3cm) | |
| 袖幅 | 9寸(34.1cm) | |
| 袖口 | 6寸(22.7cm) | |
| 袖付 | 6寸(22.7cm) | |
| 前幅 | 6寸5分(24.6cm) | |
| 衿肩明 | 2寸5分(9.5cm) | |
| 身八つ口 | 4寸(15.2cm) | |
| 前揚げ | | 計算：後揚げ - (繰越 × 2) |
| 後揚げ | | 計算：(裁切身丈 - 裾縫い代) - (身丈 + 付け込み) |
| 背縫い代 | 3分(1.14cm) | 規定 |
| 裾縫い代 | 4分(1.52cm) | |
| 裾下 | 2尺1寸(79.5cm) | |
| 衿幅 | 4寸(15.2cm) | |
| 抱幅 | 6寸5分(24.6cm) | |
| 裾ふき | 0.3~0.4cm | |
| 繰越 | 5分(1.9cm) | 5分(1.9cm)~7分(2.6cm) |
| 付け込み | 3分(1.1cm) | 3分(1.1cm)~5分 |

① 表地（衿・身頃・袖・衿）

小幅物 用布 1反 11.5～12m

| | | | | | | |
|--|----|----|----|----|---|---|
| | 衿 | 衿 | 身頃 | 身頃 | 袖 | 袖 |
| | 共衿 | 地衿 | | | | |

ア. 袖用布 = (袖丈 + 縫代 2～4cm) × 4

イ. 裁切身頃丈 = 身丈 + 繰越 × 2 + 縫代 4cm

ウ. 裁切身頃丈 = (総尺 - 袖用布 + 裁切衿下り × 2) ÷ 6

② 八掛（裾回し）

小幅物 用布 3.8～4m

| | | | | | |
|---|---|---|---|----|-------------|
| 裾 | 裾 | 裾 | 裾 | 裏衿 | 袖口 |
| | | | | 裏衿 | 袖口 衿先 衿先 |

ア. 袖口・衿先布 = (袖口明 + 5.0cm) × 2

イ. 裏衿 = 裷下 + 20cm

ウ. 裾丈 = 57～65cm位

③ 胴裏

小幅物 用布 8～8.5m

三つ衿芯

| | | | | | |
|----|----|-----|-----|----|----|
| 衿先 | 衿先 | 裏身頃 | 裏身頃 | 裏袖 | 裏袖 |
| | | | | | |

ア. 裏袖 = 袖丈 + 縫代 2～4cm

イ. 裏身頃用布 = (身丈 + 繰越 + 縫代 4cm - 裾丈 + 縫込 5～10cm) × 4

ウ. 裁切衿丈 = 身丈 + 繰越 + 縫代 4cm - 衿下り - 裏衿丈 + 縫込 5～10cm

エ. 裁切裏衿 = (衿丈 - 衿先丈 + 縫込 5～10cm) × 2

[2] 布の巻き取り



正確に裁断した布を、しわにならないように作業の順番に巻いていく。

(4) 標付け



技能ポイント

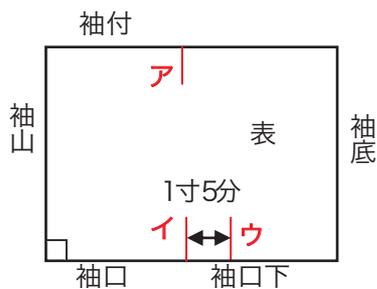
標付けをするときは、袖、身頃、衿、衤のパーツごとに袖山、肩山のわになる側を左側におき、手前にある「耳端」又は「裁ち目」が直角（90度）になるようにし、必ず真っ直ぐ揃えてからヘラで標付けする。直線部分は、15cm～20cm 間隔で、袖丸みのカーブはコテヘラで付ける。標は、基本的に、先に丈方向の標を付け、次に幅方向の標を付ける。また、ヘラの標が見えにくい生地の場合や、重要な標にはしつけ糸を用いて糸じるしをする。

[1] 袖



POINT

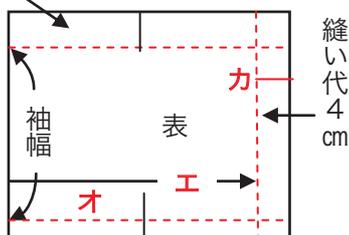
角ヘラや、コテヘラは強くしすぎると布地が切れたり、焦げたりすることがあるので注意する。



表地は、2枚中表に合わせて二つ折りにする。袖山を左側にして、重ねる。

- ア. 袖付(23cm)：袖山から標付け。
- イ. 袖口(23cm)：袖山から標付け。
- ウ. 袖口より1寸5分(5.7cm)下に標付けをする。

残りが縫い代



- エ. 袖丈+1分(0.38cm)：袖山から標付け。
- オ. 袖口・袖口下=3分(1.1cm)：手前の耳端から、袖山と袖底（右側布端）の所に標してつなぐ。
- カ. 振り側より袖底に2寸5分(9.5cm)の標付けをする。

[2] 表身頃



技能ポイント

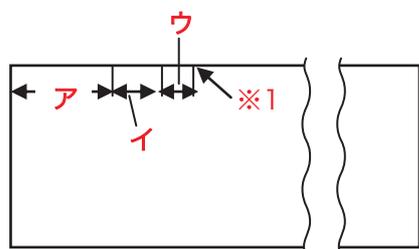
表身頃4枚の布丈を揃え、裾は地の目を通し裁ち切る。4枚の裾を揃えて、布幅の中途につれやたるみがある場合は、丈がそろそろよう霧水とコテで整える。

(前・後ろ身頃に内縫揚げのある場合は揚げで加減してもよい。)

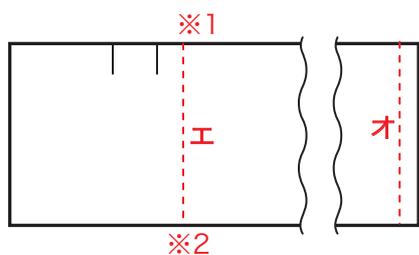
[2]-1 身頃



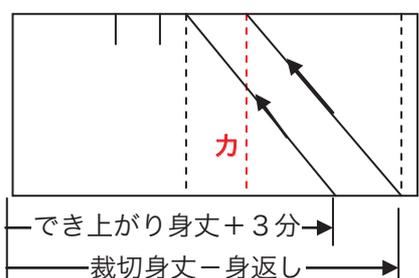
左右の身頃を中表に合わせて、背縫い側を手前に置く。布端を揃え、縦真半分に折り山を付ける。肩山(わ)を左側にして、前身頃が上になるように、四枚を揃え、重ねる。



- ア. 袖付け：肩山から、寸法を標する。
イ. 身八つ口：袖付けの印から、寸法を標する。
ウ. 揚げ下がり(※1)：身八つ口の標から、揚げ下がりがり寸法=1寸(3.8cm)を標する。



- エ. 揚げ下がり：肩山から、「袖付け+身八つ口+揚げ下がり=合計丈」を、背縫い(手前)の耳端で寸法を標して(※2)、※1で付けた標とつなぐ。
オ. 見返し(裾縫込分)=5分(1.9cm)：右側布端から、布幅の両端で寸法を標してつなぐ。

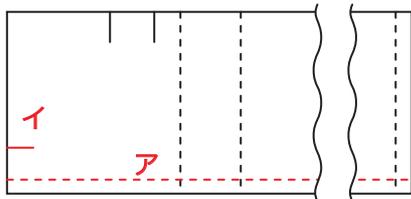
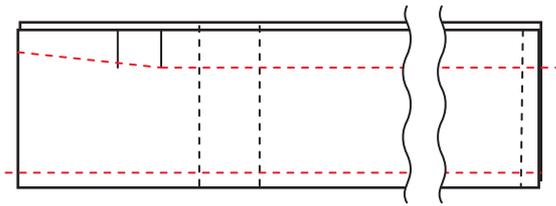


- カ. 揚げ丈=(裁切身丈-身返し)-(でき上がり身丈+3分(1.1cm))揚げ下がりの標から、布幅の両端で寸法を標をつなぐ。

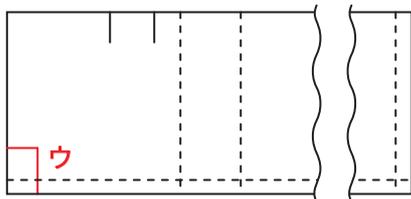
POINT

肩山のわが真っ直ぐでないと、身幅の中心部分で寸法が違ってくる。寸法の標付けのときは、どの部分(パーツ)でもわたとなる所は必ず真っ直ぐ揃えてから標付けをする。

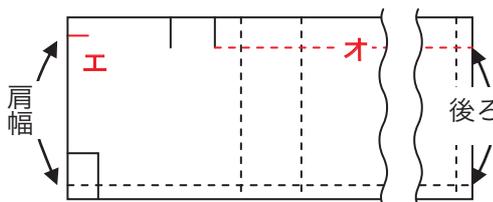
[2]-2 後ろ身頃 (表生地)



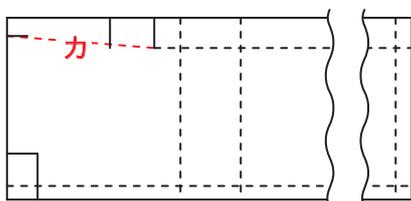
- ア. 背縫い=3分(1.1cm)：手前の耳端から、肩山と、裾（右側布端）の所で寸法を標しつなく。
- イ. 衿肩明き：肩山で、背縫いの標から、寸法を標する。



- ウ. 繰越：肩山から、背縫いと、衿肩明きの所で寸法を標してつなく（角は5分丸味）。

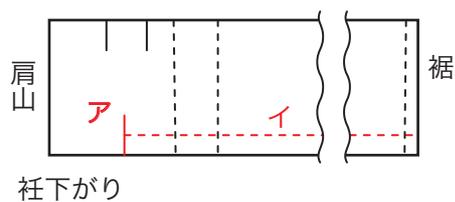
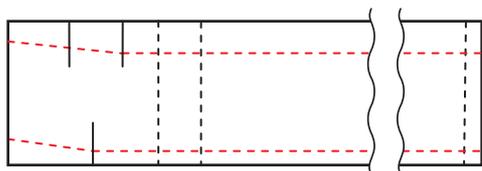


- エ. 肩幅+1分 肩山で、背縫いの標から、寸法を標する。
- オ. 後ろ幅+1分：背縫いの標から、身八つ口と、裾（右側布端）の所で寸法を標してつなく。

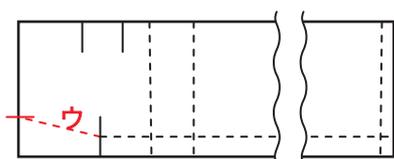


- カ. 肩幅の標と後ろ幅の身八つ口の所の標をつなく。

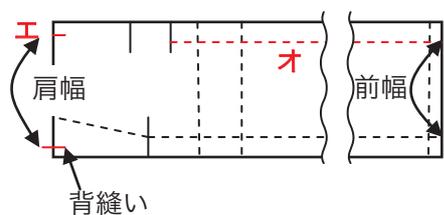
[2]-3 前身頃 (表生地)



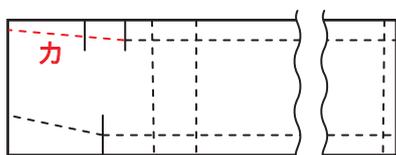
- ア. 衿下がり：肩山から、寸法を標する。
- イ. 衿付=2寸(7.6cm)：手前の耳端から、衿下がりと裾（右側布端）の所で寸法を標してつなぐ。



- ウ. 後ろ身頃・衿肩明き+1分(0.38cm)の標と、前身頃・衿下がりの標をつなぐ。



- エ. 肩幅+1分：肩山で、背縫いの標から、寸法を標する。
- オ. 前幅+1分：衿付の標から、身八つ口と、裾（右側布端）の所で寸法を標してつなぐ。



- カ. 肩幅の標と前幅の身八つ口の所の標をつなぐ。

[3] 八掛 (裾回し)

裾の地の目を正しく通し、裁ち切りを揃えて標をする。ぼかし染の場合は、ぼかしの段を揃える。



重ねた場合、ぼかしが揃うように合わせる。

POINT

袖口、裾、身頃、衿、衤にぼかしの色が揃うと美しい仕上がりになる。



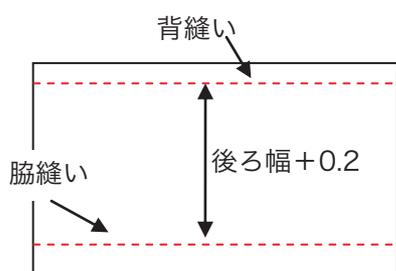
まち針で留めて、標付けをする。



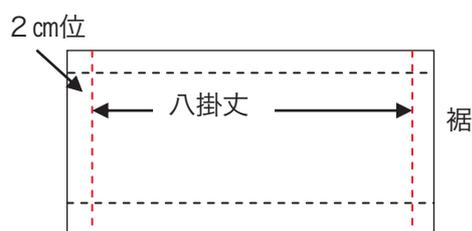
[4] 胴裏（競技前に作業）



[4]-1 八掛（裾回し）



背縫いから後ろ幅+0.2cmに標をし、耳端を揃えて脇縫いをする。

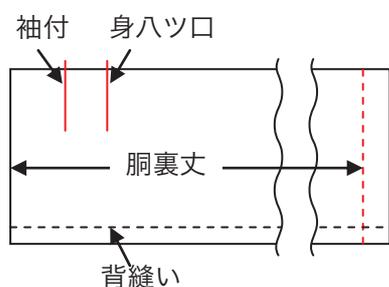


裾及び上（胴はぎ側）の布目を通し八掛丈に標を付ける。

POINT

裾ぼかしのものは後・前・衤のぼかし、丈および色を揃える。

[4]-2 胴裏



胴裏丈 = 裁ち切り身丈 - 繰越 + ふき × 2 - 八掛丈

POINT

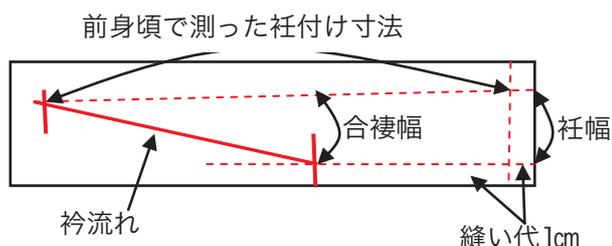
胴裏は繰り回して使うこともないので、裁ち目を合わせて、繰越をずらさず、切り繰越で仕立てる。

[5] 衿

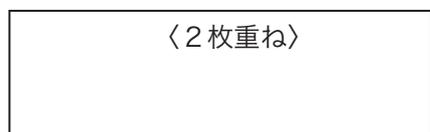


技能ポイント

表、裏ともに裾の地の目を通して裁ち切る。
次に裏衿に衿先を縫込み分重ねておき、その上に裾ふきの二倍分控えて表衿をおく。



左右の衿を中表に重ね合わせて、裁ち目を揃えて手前に置く。



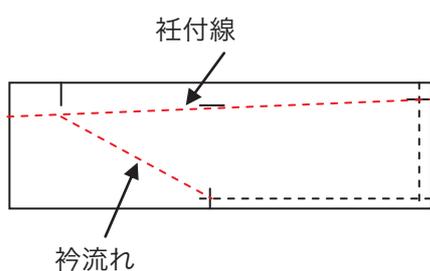
裁ち目



- ア. 見返し=5分(1.9cm)：右側布端から、布幅の両端で見返し寸法を標してつなぐ。
- イ. 衿丈+2分(0.76cm)：見返しの標から、耳端側で寸法を標する。
- ウ. 襷下：見返しの標から、手前の裁ち目側で襷下寸法を標する。



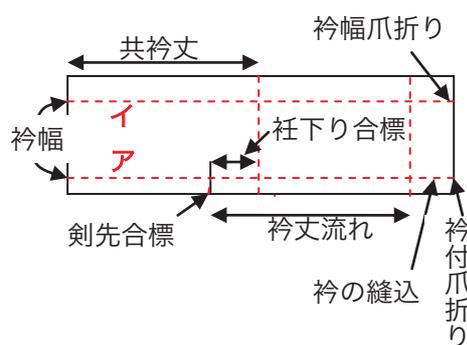
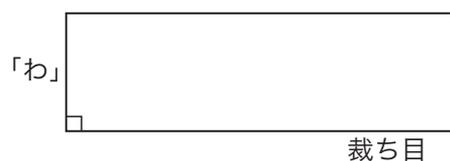
- エ. 襷下くけ代=3分(1.1cm)：手前の裁ち目から、襷下の標より1寸5分(5.7cm)位左側と、右側布端の所で寸法を標してつなぐ。
- オ. 衿幅+1分(0.38cm)：見返しの所で、襷下くけ代の標から寸法を標する。
- カ. 合い襷幅+1分：襷下の標の所で、襷下くけ代の標から寸法を標する。



衿付線は、衿幅と合い襷幅の標をつないで、その線の延長真っ直ぐにものさしを当てて、衿丈の標までつないで標する。衿流れは、衿丈の標から襷下の標をつないで、衿流れを標する。

[6] 衿

【表衿】



表衿は衿を中表にして、わが左側になるように、裁ち目は揃えて手前にして置く。わと裁ち目が直角になるようにまち針で留めてから標をする。



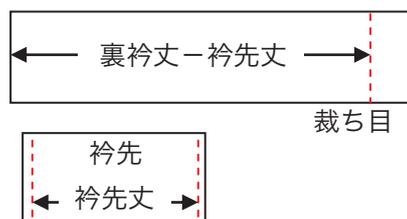
ア. 裁ち目から3分(1.1cm)の所に衿の縫込みの標を付ける。

イ. 縫込み標から3寸(11.4cm)の所に衿幅標を付ける。

**POINT**

衿幅の標の上の縫込み（耳）を繰越の標あたりまでコテで少し伸ばしておく、縫込みを入れ込んだときに耳がつかず仕上がりがきれいになる。

【裏衿】



裏衿も裁ち目を揃えて手前に置く。
衿先の両端に縫い代を取り、衿先丈標を付ける。

[7] 標付け後、生地縫製準備



標付けした表身頃を、しわにならないように作業の順番に巻いていく。

(5) 縫製

裏表をよく確認して、縫い目は標どおり真っ直ぐ縫う。縫い始めと縫い終わり、標の交わった所は返し縫いをして、玉留めはなるべくキセを掛けた時に見えなくなる方にする。

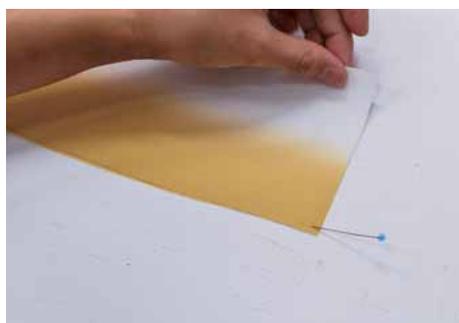
[1] 袖



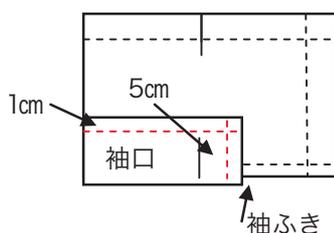
技能ポイント

縫い目が真っ直ぐになるように同じ間隔で正確に縫っていく。厚さや伸びの違う表地と裏地を微妙なつり合いで縫い合わせる。コテを使いながら袖の丸みを美しく作る。

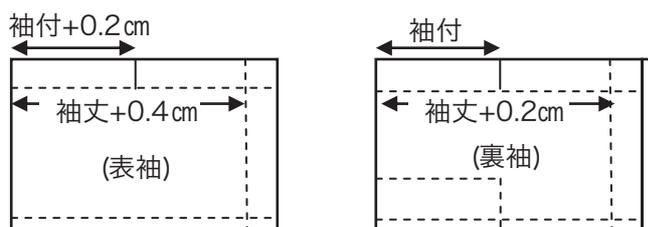
[1]-1 袖口布掛け (回し掛け)



裁断した袖口布の端をまち針で留め、中表に合わせ、二つ折りにした袖口布に、標付けをする。



裏袖は、袖口布の袖口丈縫い代が正確にくい違いになるように注意して並べ、標付けをする。



袖口布の標を付けたところを、爪で軽く折り目を付ける。懸張器を使って裏袖の標を爪でしごいてつなぐ。袖口布の標も同様に爪でしごいて折り目を付けつなぐ。





裏袖から袖口布の方を袖山と袖口耳よりそれぞれ8厘(0.3cm)出してまち針で留める。

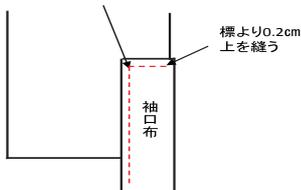
POINT

まち針は、袖口布のほうだけ、標よりキセ分として2mm大きくなるようにまち針すると美しい仕上がりになる。



袖口布を裏袖に縫い留める。

角で1針返し留めをして袖口布を廻す



袖口掛けは、裏袖に回し掛けで袖口布を縫い付ける。



回し掛けは、袖口布の一边を中表で縫う。次の辺に移る角にきたら、糸を玉留めして、この糸を基軸に袖口布を90度回す。



糸を引きつつ、次の一片を縫う。縫い進めて、次の角にきたら、また布を回す。





2回袖口布を回して縫って、3辺を縫い上げたら、角の縫込みを綺麗にたたんで、表に返す。



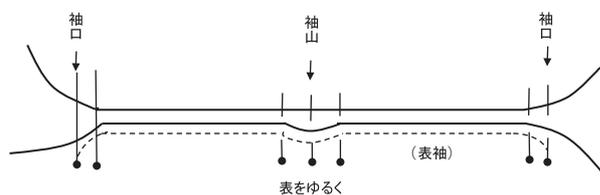
角を綺麗に直角にして袖口布を裏袖に付ける。



コテを掛け仕上げる。



[1]-2 袖口合わせ



技能ポイント

袖山で表を少しゆるくする。袖口留めは袖口ふきをきれいに出すために裏袖と袖口布を袷形に縫う。



袖口の標に、まち針を打つ。



袖山をはさんでまち針を2本打ち、その中間にもまち針を打つ。



生地のはり合いは表地、袖口布、胴裏の生地質により加減する。あとははり合い良く真っ直ぐに縫う。



縫い合わせたら5厘(0.19cm)のキセを掛けて折り、コテを掛ける。

[1]-3 袖口四つ留め

袖の左右がこの留めにより区別される。表袖を手前にして留めると左袖になる。



袖口の留めはでき上がりの状態で、袖山を右にして袖口の標のところの手前の表地の裏側から2本どりの糸で針を刺す。

ア. 袖口→袖口と横にすくう。(裏袖まですくう)

イ. 向こう側の表地を地の目を2本位縦にすくう。



ウ. 手前の表地の初めに針を刺したところから地の目を2本位袖下寄りに表から針を刺し裏側で糸を縛る。



[1]-4 袖口下

袖口布丈いっぱいまでは表、裏別々に縫う。表は内側の布を斜めに折って縫い、裏は普通に縫って縫目を割る。



口下の縫い方は、口の留めの縛った糸の3本は切り、残りの一本で表地を3寸(11.4cm)位細かい針目で縫う。



裏地の袖口布の部分は口合せの深さより5厘(0.19cm)下を縫い袖口布より下で口合せの深さに戻し3寸5分(13.3cm)位を縫う。



袖口布のところは割り、それより2寸5分(9.5cm)位下で縫込みを起こし、コテを掛ける。

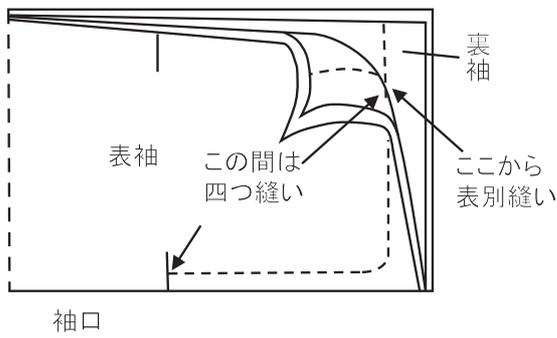


表地は倒した縫込みをすくうようにし、裏地は袖口布の割ったところより下から倒した縫込みをすくい、表と裏の縫い目をとじ合せ、4枚を束に縫う。(裏地の袖口布の部分は倒さない。縫込みのみを口合せの深さでとじ合わせる。)



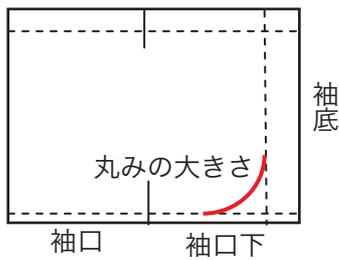
袖丈の標の5分(1.9cm)手前で一旦糸こきし、玉留めをして袖丈の標まで口下を縫う。(5分丸味以外はそれぞれ袖丈の標より丸味の大きさ分の手前で、一旦糸こきし、玉留めをする。)

[1]-5 袖下



技能ポイント

袖口下から丸みに沿って袖下を3分の2まで四つ縫いし、残りは表、裏を別に縫い、丸みをしぼる。



袖口下と、袖底の標の角から、丸みの大きさ（寸法）を標して型紙を置き、標付けをする。



まち針をして丸味を描き、振りの袖幅から2寸5分(9.5cm)のところに標をする。



標をしたところまで裏袖を縫う。一旦縫い留めをして振り口から表地を一緒に縫い、袖幅の2寸5分の手前から表裏地を別々に縫う。



つれないように縫っていく。





丸味を縫って口下を1寸(3.8cm)位重ね縫いして糸留めをする。



コテを掛けたら(キセは5厘(0.19cm))丸味の縫いの1分(0.38cm)上を8針ぐらいで縫い糸を引いて丸味を絞る。

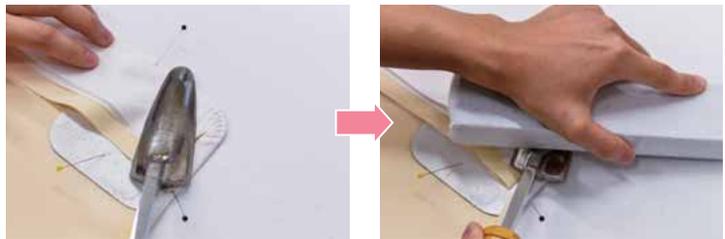
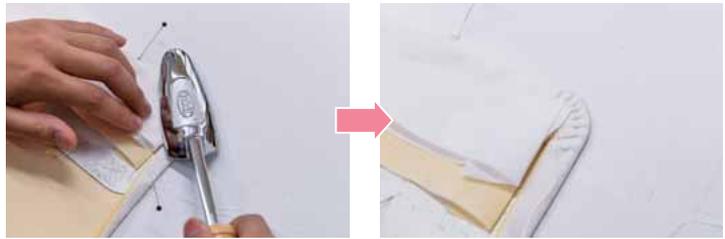
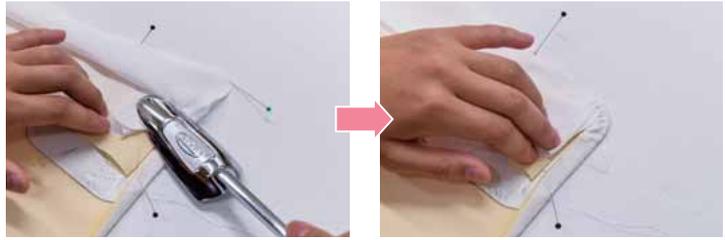
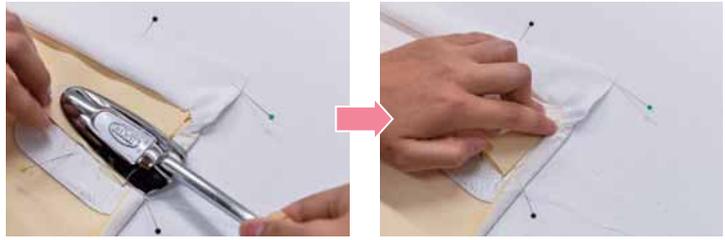


袖丸みの型紙をあてる。



型紙を当てた表地を一枚ずつタックをとり、裏地は2枚重ねてタックをとり丸みをつぶして縫込みをおさえる。





袖を表に返して丸みを整え、縫い代をとじる。



[1]-6 袖のしつけ

技能ポイント

しつけはぞべ糸（絹糸）を使い、きものを仕立てる時に形を整える。着用する時には解く。袖を縫う時も袖口のふきや口下や袖下と続けてしつけをする。



しつけの種類は5分(1.9cm)飛ばしとし、左袖は袖下から、右袖は袖口からする。左袖で、袖底の袖幅のところから裏袖と表地を別々に縫った部分の表地と表の縫込み計3枚にしつけをして（ぞべの深さは1分(0.38cm)で針目は5分位）、袖底4枚を束に縫ったところから表地、裏袖、縫込みの計6枚全てにしつけをする。



袖口留めの手前と袖口留め部分も数針ぐしする。



しつけを解いた後でも口ふきの形が崩れないように袖口のかくししつけをする。口合せの表地と袖口布と裏袖の縫込みを袖口布表のしつけをした地の目2本位下に、地の目2本位の針目を出して裾回しの糸で1寸(3.8cm)位の間隔でおさえておく。



[1]-7 袖口仕上げ



袖口に型紙を入れて、表はつまらないように、裏は波打たないようにコテを掛ける。



袖口を引っ張って整え、仕上がりが平たく真っ直ぐになっているか、また、袖の丸みの厚みが不自然でないかを確認する。



[1]-8 袖幅標付け



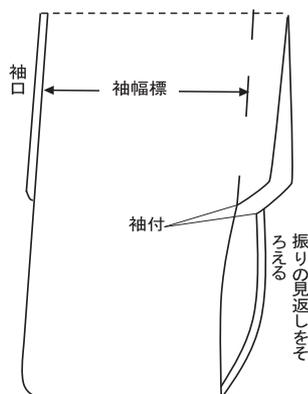
袖幅の寸法の標を付ける。表袖口、袖口下から測って袖山と袖付けは5厘(0.19cm)、振りの間は1分(0.38cm)広く、表裏4枚に小さく標を付ける。



布が重なっている部分でコテの標が見えにくいところは、内側からもコテをする。



[1]-9 振り縫い



技能ポイント

表は標どおり折り目をつけ、裏は標の1分(0.38cm)幅を控えて折り目をつけ、これを中表に合わせて縫う。表、裏のつり合いは地質によって異なる。また振りは表が外に回るのでやや表をゆるくする。

裏の方にキセ折りし表に返す。振りの見返しは5厘(0.19cm)になるように整える。



裏袖の折り山を表袖の折り山から5厘(0.19cm)、縫い代側にずらす。表袖は標のとおり針を刺し、裏袖は標の5厘下に、まち針を打つ。まち針したところを持って、表袖の裏を出す。



POINT

袖下の折り山にまち針するときに裏袖を5厘ずらすと、でき上がりの収まりが良くなる。



外側にある表袖と裏袖を合わせ、袖付けの標でまち針を打つ。このときも裏袖は標から5厘下にまち針を打つ。袖付けの標から縫い始める(縫い始めは返し縫い)。袖の一番下、折り山で返し縫いを2回する。

POINT

運針のガイドとして、糸の延長線上にまち針を打つ方法がある。



POINT

表袖を少したるませて縫うと、裏袖が波打たず綺麗に仕上がる。





半分ずつキセを掛ける。



袖下まで縫ったら、内側に入っている布をやさしく引き出す。

袖付けにまち針をし、
間にもまち針を打つ。
裏袖は標より5厘
(0.19cm)下にまち針を
打つ。



コテを掛ける前に、爪で裏袖に軽く折り目を付ける。
(キセは掛けない)

POINT

表袖には折り目を
付けないように気
をつける。



裏袖が表に出ないように（5厘控える位）指でごく軽く
布を押さえる。左手は布を強く引っ張らないように注意
する。

[1]-10 袖仕上げ



袖付け側に型紙を入れ、コテを掛ける。



表がつまらないように、裏は波打たないようにコテを掛ける。



袖の仕上がり。



[2] 表身頃

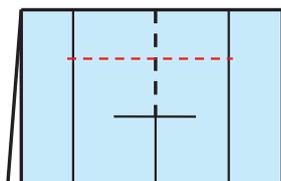
[2]-1 内揚げ・背縫い

並幅のときは表と同じように縫い、キセ折りは表と逆に折り左身頃の方に入れる。

ア. 内揚げ (後ろ身頃、前身頃)



揚げの標を付けたところから標付けのところまで爪で折っていく。



端から等間隔にまち針を打つ。



後ろ身頃は、脇縫いの標の4mm先まで縫う。

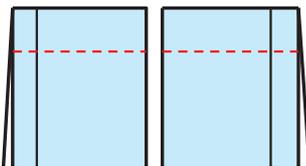


コテでキセを掛ける。





前身頃は布端から布端まで縫う。



縫い代は2mmのキセを掛け、コテで整える。

POINT

横地は伸びやすいので、内揚げの縫いでは生地を伸ばさないように波打たないように注意する。



キセが外れないように、隠しとじでとじる。



裏からコテを掛ける。



イ. 背縫い



縫い代3分(1.14cm)にコテで標付けをする。



コテを掛けてから、爪で折り目を付ける。



衿肩明きに、はさみで切込みを入れる。



身頃の布丈を揃え、まち針で等間隔に打つ。



縫い代3分(1.14cm)で縫う。裾は5cm位返し縫いをする。衿肩明きのところは1.5cm縫い残す。



50cmほど縫ったら、縫い目のつれをしごいて直す。背縫いでは3回ぐらいしごく。



返し縫いは縫い幅が変わる。
力がかかる所では縫い幅を狭くする。



[2]-2 後ろ幅標付け



ものさしを当て、背縫いから測ってキセ代1分(0.38cm)を加え、標付けをする。



キセを掛ける。



ズレないように標付けしたところを手で押さえ、コテを掛ける。



[2]-3 脇縫い



後ろ身頃の標に折を付け、前脇の縫込みを合わせて縫う。



2mmのキセを掛け、八掛の部分の縫い代は2枚とも前身頃側に倒し、コテを掛ける。



全体にコテで押しをする。



内揚げ部分は三角に割る。袖付け線もきれいに折っておく（表生地だけを折り、胴裏は折らない）。



[2]-4 衽付け



前幅標を付ける裾に前身幅にキセ代を加えた寸法で標をする。



抱幅は前身幅より、普通1.5cm～2.3cm（前幅の斜め寸法）控えて身八つ口下のところで測り標を付ける。他の部分は裾から抱幅まで3～4か所に割り当て標をしてから、まち針を打つ。



前身頃と衽の表を合わせて、衽先から裾までを縫い合わせる。終わりは返し縫いをする。



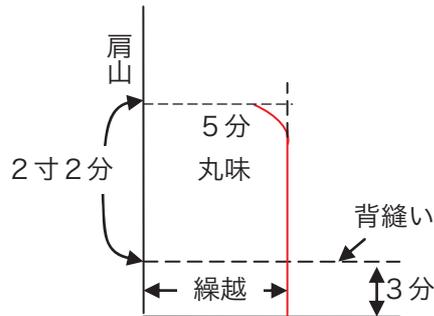
[2]-5 衿肩明き・衿付け

技能ポイント

衿付側は、1cm 縫い代に折りを付け、身頃と中表に合わせ、衿山と背キセ山、衿肩明き合い標と肩山、衿下がり合い標と衿下がり、衿先と襟下を合わせてまち針を打つ。

衿先 4cm 衿肩切口 4cm は半返し縫いをし、剣先及び衿山で返し縫いをする。衿付けした後に流れの縫込みを衿付け線に沿ってしつけておさえる。

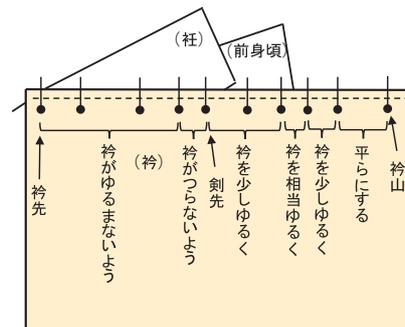
ア. 衿と身頃



衿肩明きは背縫いから2寸2分(8.36cm)、5分(1.9cm)の丸味を標付けて裁ち切る。



衿と身頃の表を合わせて、背中央から衿先まで、衿付け位置にまち針を打つ。



背から衿肩まわり、衿下がりにかけては衿にゆるみが入るので、適当に配分してまち針を打つ。



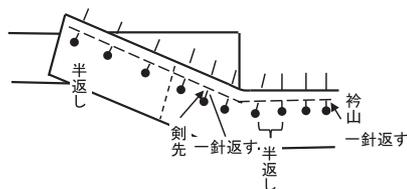
イ. 衿と衤



衿を付けるために衤に衿の流れの標付けをして、衿先をまち針で留める。



衿を等間隔にまち針を打つ。衤下がりから衿先の間は、剣先から10cm位下まではほんのわずかに衿をゆるくし、他は平らなつり合いでまち針を打つ。



衤と衿を縫っていく。



衿と身頃を縫っていく。



[2]-6 共衿（掛け衿） 付け



共衿の縫いのキセは1分(0.38cm)なので、共衿丈の標の1分上に標をする。共衿にしつけをする。



縫込みを5分(1.9cm)とり共衿掛けの折りをする。共衿掛けの折りから横縫いの部分は3寸2厘(11.5cm)位、それ以外は3寸5厘(11.6cm)で共衿幅の標をしてコテで折りをする。

(共衿掛けの横縫いの縫込み部分の衿くけの折りは、共衿幅を3寸(11.4cm)あたりとそれ以外の部分と逆に折りをする。)



共衿丈の標にまち針を打つ。



共衿の横縫いをしてから共衿掛けの縫込みを反対側の共衿の横縫いに縫い付ける。



できるだけ地衿の縫い目の際に寄せて共衿をくけ付けする。





共衿横縫いに1分(0.38cm)のキセがかかるように表からぞべておさえる。



[2]-7 衿仕上げ



衿幅に標を入れ、折った後コテで整える。



[3] 裏身頃

[3]-1 裏前身頃幅標付け

表と同寸、ただし裾のみ3厘(0.1cm)程度控える。



裏前身頃幅の標付けをする。



標したところを爪で折る。



[3]-2 裏衽付け



まち針を両端、中央に打ち、その後、等間隔に打つ。



ぼかしとぼかしのない所の縫い方は糸色を変えて縫う。



コテでおさえる。

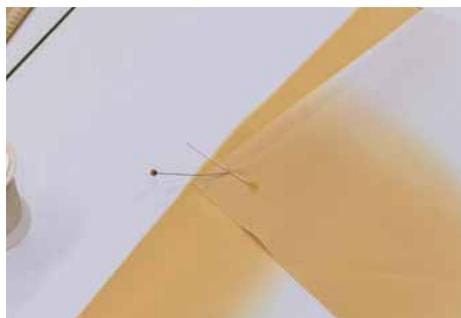


[3]-3 裏衿付け

表と同じように衿付けする。キセ代3厘(0.1cm)に衿付縫代を衿の方へ折り、表衿付けと同様に流れの衿付のきわをしつけておさえておく。



衿付け位置に標付けをする。



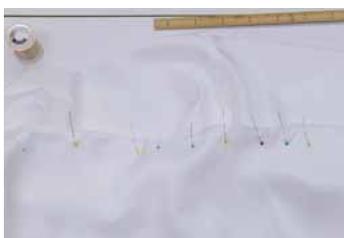
衿先にまち針を打ち、縫い代を付けていく。



縫い代を衿の方に折り、まち針でおさえ、コテで整える。



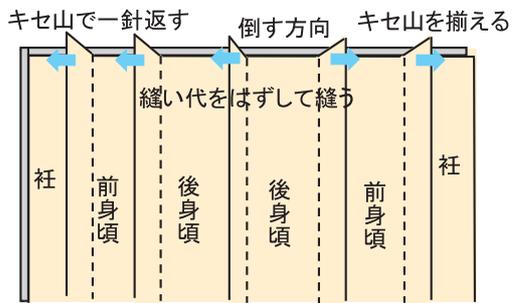
縫い側に対して直角にまち針を打つ。背から衿肩まわり、衿下がりに等間隔にまち針を打っていく。衿のカーブになるところはゆるみが入るようにまち針を打つ。



ぼかしのある衿先部分のみ色糸で縫い、あとは白糸で縫う。



[4] 裾合わせ



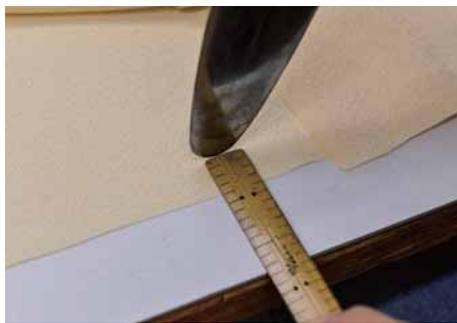
技能ポイント

表、裏の背、脇、衿付キセ山を正しく合わせ、裁ち切りを揃えて縫う。芯は後からとじつける。

芯と表布のつり合いは、平らになるようにする。背、脇、衿の縫目のところは小さく一針返し針をする。裾は1分(0.38cm)のキセで縫代を表側に倒す。

[4]-1 裾合わせ

ア. 衿と身頃



ものさしをあて、標付けをし、爪で折る。



縫い代を前身頃に倒し、コテでおさえる。



表と裏のキセ山を合わせる。

POINT

八掛(裾回し)も、胴と同じ方向に倒す(この縫い代をとじ合わせる時に使う)。



八掛(裾回し)を見て背、脇、衿の裏、表の素縫いの縦縫いを合せ、まち針を打つ。この時、後ろ側の表地が運針の際左方向にズレがちなので、前もって表の縦縫いのキセ山を1厘ほど右方向にずらしてまち針を打つ。

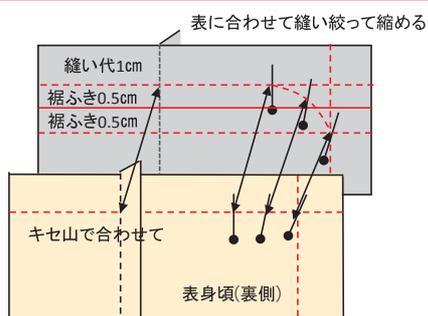




折り山を揃えて縫い合わせる。



イ. 裨の縫い方



衿のキセ山で合わせる。八掛（裾回し）の3分(1.14cm)手前から自然なつり合いで、表に合わせてカーブを付ける。ぐし縫いして縫い縮める。3分の間は表標どおりに0.1cmの針目で縫い、一針返し針をしてから0.3cmの針目で縫いすすめる。身頃の縫い代ははずして縫う。キセ山で一針返す。



POINT

裏は丸みを付け、表は少々浅く縫う。



裏からコテで押さえる。



[4]-2 裾のしつけ



表、裏の裾を広げ、キセ山から1分(0.38cm)のところへしつけをする。表裏下をできあがりで折り、1分入ったところにしつけをする。



しつけした後、コテで整える。



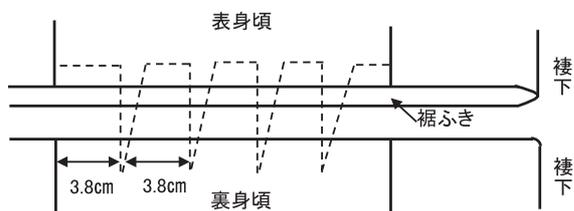
裾芯を八掛（裾回し）側からあて、芯の裁ち目を裾合わせの縫い目より0.5cm出す。



本縫い線を、ぞべで3cm間隔の針目で仮とじする。



[4]-3 裾とじ (ふきとじ)

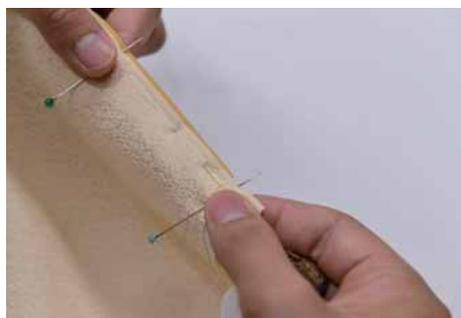


技能ポイント

上前の縦襷からふきとじする。縫い目から始め1分(0.38cm)一針とし、表はその倍だけ目を出す。各キセ山ではさし針でしっかり留める。針目は目立たないように小さくする。



裾に芯を含ませ、胴と胴裏を合わせ、まち針を打つ。裾芯を仮とじした糸ははさみでカットする。



裾の縦縫いのところに、縦に待ち針を等間隔に打つ。

POINT

前もって針目を出すところに目印のまち針をしておく
と等間隔に針目を出しやすい。



約1寸(3.8cm)間隔で表の裾の折りより1分と地の目一本上のところに針目を出すようにしてふきとじをする。



針の刺し方は、表から針を刺し裏をすくい、裾の中に針を通して表から針を出す。また縫込みのところは表から針を刺し、一旦裏から針を抜いてもう一度裏から針を刺し、裾の中に針を通して表に針を出す。





表は1寸(3.8cm)1針として裏は針目を目立たないように小さくする。横とじの最後は縦棲の縫いのところで糸を留める。



コテで裾を仕上げる。



裾芯の仮しつけ糸を取る。



裾をおもりでおさえる。



[5] 中とじ (背とじ⇨脇とじ⇨衿とじ⇨反対側の脇とじ⇨衿とじの順番でとじる)

[5]-1 背とじ

技能ポイント

裾から1寸(3.8cm)上からとじあげる。表裏の縫目を正しく揃え、縫目より5厘(0.19cm)内側を1寸間隔で上下のつり合いを見て正しくとじる。胴はぎのところは必ず針を掛ける。



糸は滑りにくい木綿糸を使う。裾からとじるところにまち針を打つ。



裾ふきがかずれないように注意しながら裾ふきの5分(1.9cm)位上で縦にまち針を打つ。



背縫いを引き出し、山は衿付けまで、本縫いの5厘上を2cmの針目でとじつける。



胴はぎの縫い代も丁寧にとじる。



[5]-2 身八つ口の留めと縫い

技能ポイント

表身八つ口から肩山まで折りを付け、裏は表の幅と同寸で標を付ける。身八つ口では裏地が出ないように控えて縫う。



身八つ口下を表・裏合わせて四つ留めをする。



糸が絡まっていないか確認して留める。



まち針を打った後、身八つ口留まりの三分(1.1cm)上から表は折の5厘(0.19cm)中、胴裏は標どおりに袖付けの5分(1.9cm)手前まで縫う。



表は袖付けで折の所が縫い留まりになるように縫う。



[5]-3 脇とじ

技能ポイント

表と裏の脇縫いの縫い目がずれないように重ねて、縫い目の5厘(0.19cm)上を1寸(0.38cm)間隔でとじる。



脇縫いのとじも背縫いのとじと同様に、裾ふきがくずれないように注意して裾ふきの5分(1.9cm)位上に、縦にまち針を打つ。



脇縫いを引き出し、裾から身八つ口留まりまで、本縫いの5厘上を1寸間隔でとじつける。



縦とじが終わったらコテで先ほど縫った身八つ口の仕上げを掛ける。



[5]-4 衽とじ



表裏を合わせて剣先にまち針を打つ。背中心～剣先間、剣先～衿先間のつり合いと、衽丈のつり合いを見てまち針を打つ。

POINT

衽はぎの所までしかとじられないので、とじている所とのつり合いに気をつける。

7分(2.6cm)から8分(3cm)の間隔でとじる。



胴はぎの縫い代が引っかかっているか確認する。
(右図のようにならないようにする。)

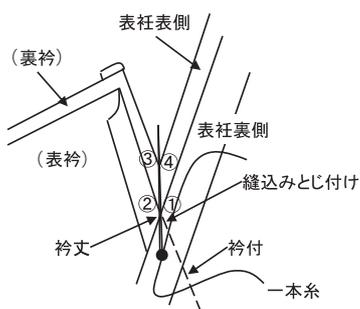


[6] 衿先留め



技能ポイント

表裏衿先を袂下側から裏返し、衿を中側にして、順に針を入れ1回または2回繰り返して結ぶ。

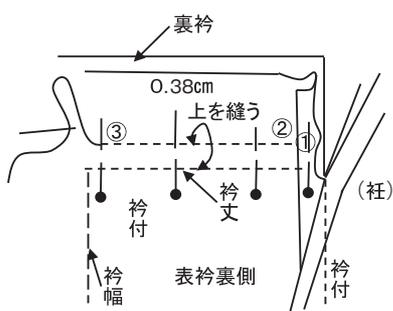


衿先留め

- ① 表衿裏側衿付け留まりに針を入れる。
- ② 表衿キセ山に針を出す。
- ③ 裏衿の表側より裏衿キセ山に針を入れる。
- ④ 裏衿裏側に針を出す。

針を④に抜いて①～④を繰り返す(左の衿先の図中番号順に針を進める)。

または④～①に針を入れる方法(さしぬき)もある。

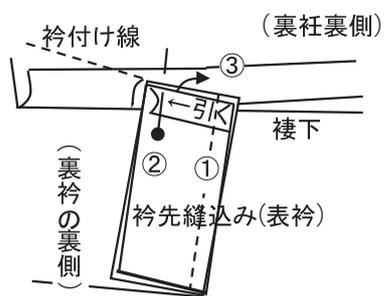


衿先縫い

- ① 表衿が少しゆるむように衿丈の1分(0.38cm)上に打つ。
- ② 表衿幅を少したるませて打つ。
- ③ 表裏衿幅丈を合わせて打つ。

衿先留めの糸を切らず、衿丈の1分(0.38cm)上側を縫う。



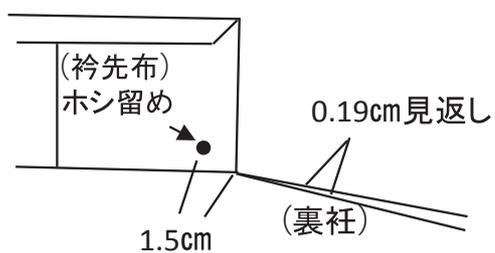


衿先縫代のとじ

- ① 衿先縫込みを裏衿側に倒す。
- ② 衿付線と縫込み、端を揃え上の方に引っ張ってまち針を打つ。
- ③ 2、3針縫込みをとじつける。表を返して整える。



[7] 裨下くけ



技能ポイント

表衿の幅を約2寸(8cm)間隔で裏衿に標をして、5厘(0.19cm)幅を控えて折り裨下くけをする。裨下のくけ糸で衿先上方1.5cmにさし針で留めを入れる。



裾芯をカットして、折りたたむ。



角を直角になるように整え、角に引き糸を付ける。



引き糸を引っ張りながら裨先を折りたたみ、まち針で留める。

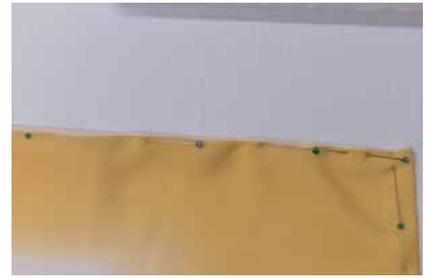


表縦裨に5分(1.9cm)の標に折り、しつけをする。





裏縦裄が5厘(0.19cm)控えるように折りを付け、表とつり合いよくまち針を打つ。



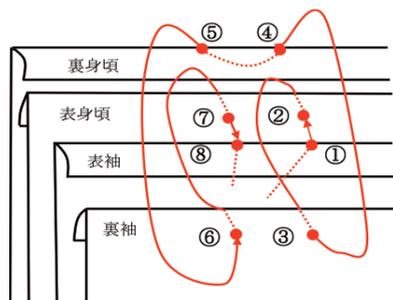
裄下くけをして、衿先上方1.5cmにさし針で留めを入れる。



縦裄をコテで仕上げる。

[8] 袖付け

[8]-1 袖付けの留め方



袖と身頃をしっかりと留める。糸は2本取りにし、図の順番で刺していく。全部通して糸を引き締め、片側の糸を引くとスーと動く状態にする。

④と⑤の間は、生地織り糸2~3本程度、①と⑧をしっかりと米結びしたら、片方の留めのところは4本長めに糸を残して切って、もう片側の留めを行う。もう片側の留めの方は、しっかり結んだら1本残して3本は切る。残った一本で袖付けを行う。



[8]-2 袖付け ア. 表袖付け



身頃の肩山と袖の袖山を中表で合わせる。



一番上の身頃の裏に出す針の位置は振りで縫った線から1.5mm位下（キセ分）になる。糸を5～6cm残して、内側の2枚に針がきちんと通っているか確認しながら、結んで留める。



身頃は、引っ張って真っ直ぐになるところに軽く折り目を付け、折り山からまち針し、袖側は標にまち針を打つ。



2～3cmほど返し縫いをしてから、身頃の折り山から5厘(0.19cm)のところを縫い、袖山では針目が1分(0.38cm)になるように縫う。



後ろ袖付けは、身頃と袖のキセ山を揃え、まち針を打つ。袖付けまで縫い進めたら、前袖付けと同様に、返し縫いをする。内側の2枚に針が通っているか確認して、玉留めする。



イ. 裏袖付け



裏身頃の肩山と裏袖の山の標を合わせてまち針を打つ。



たるみ（張り）具合のつり合いを見て、片方にたるみ（張り）が多い場合は袖山で調整する。前後の張り具合を均等にして、間にまち針を打つ。



縫い始めは縫い代の際々(1.5mm)を縫う。2cm位返し縫いをする。

POINT

懸張器で袖付けの延長線上を挟むと作業しやすくなる。



袖山は5厘(0.19cm)の縫い代になるように縫っていく。袖山では2~3針返し縫いをする。反対側にまち針を打ち、同様に縫う。



縫い終わりも2cmほど返し縫いをして、玉留めする。

[8]-3 袖仕上げ



全体に軽くコテを掛けて、各部の折り目を付ける。



袖口、袖口下、袖下、振り、袖付けにコテを掛け、袖山から肩山にかけて幅の小じわを布目にそって伸ばす。



POINT

1. コテを掛ける順序は細かい部分から。
2. 左手をうまく使い、縫い目を引っ張りながら掛ける。
3. コテは直線に動かす。ジグザグに動かすとしわになりやすい。
4. コテを動かす時は、先を少し浮かせるような感じで。
5. 生地が厚い部分は裏表からコテを掛けると、しわが伸びビッシと掛かる。



裏側も同様にコテを掛けていく。



[9] 全体のつり合い確認



中とじ後、表袋が入って膨らみがでていないか、身頃と袖付けなど、つり合いがとれているか、衿とじの前に確認する。

入針等がないか確認する。



[10] 衿とじ、くけ

技能ポイント

衿先、剣先、背にまち針し、表裏衿丈のつり合いを見て衿とじをする。衿先～剣先は5～7分(1.9～2.66cm)の針目、剣先～背中心は2～3分(0.76～1.14cm)の針目とする。注：衿肩明きの角は必ず針目を入れる。

[10]-1 衿とじ



表の素縫いと裏の素縫いの衿付けの縫い目を合せて背中心にまち針を打つ。



衿下がり、衿肩明きに、つり合いがおかしくならないように、適当な間隔にまち針を打つ。

POINT

丈かぶり、衿かぶりがないように、表と裏のつり合いに気をつける。



衿肩明きの所はやや細かく、それ以外は8分(3cm)位の間隔で衿付けの縫い目の5厘(0.19cm)位上に衿とじをして上前の衿下りのところで糸を留める。



[10]-2 三つ衿芯始末



三つ衿芯を二つ折りにして中心を決める。



衿肩まわりの縫い代にしつけで留める。



表衿と裏衿の縫い代を合わせ、とじつける。



[10]-3 衿くけ



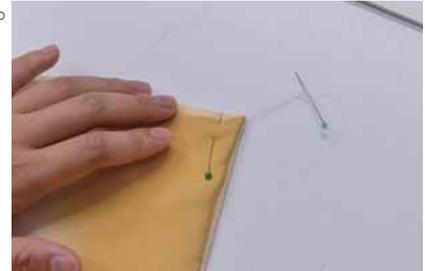
衿付けと共衿掛けができたなら衿の中に入る縫込みを折りたたむ。裏衿付けを表からキセを掛けないようにコテを掛ける。



引き糸を衿先に付け、引っ張りながら衿先を折りたたみ、まち針を打つ。



衿先留めをした後、衿が動かないようにまち針で留めて地衿と裏衿を合わせる。



地衿と裏衿の折り部分をコテを掛けて折っていく。



地衿と裏衿をまち針で打つ。





地衿に表地の色糸で小さく針目を出して地衿と裏衿を縫い合わせる。



地衿と裏衿を本ぐけ縫いする。

[10]-4 衿仕上げ



地衿がのぞかないように共衿にコテを掛け、次に衿に掛ける。さらに衿の裏側にコテを掛ける。



裾先、共衿下にコテを掛ける。

(6) 仕上げ



技能ポイント

仕上げにコテをあてしわを取る。全体の縫い目が真っ直ぐなこと、コテ光り、焼けこげ、しみ等がないかがポイント。

[1] 身頃



後幅、前幅、衿幅に、布目に沿ってコテを掛け、間の小じわを伸ばす。



折りクセを①背縫いのキセ山より1分(0.38cm)上、
②脇縫いのキセ山より1分(0.38cm)先、
③衿付けの縫い目より1分(0.38cm)先に付ける。



①



③

[2] 検査・検品

各寸法の確認、コテ光り、焼けこげ、しみ等がないか確認する。



8 期待される取組の成果

競技会向けの訓練は、若年技能者が有している技能の長所・短所を自ら確認しながら、短期間で自分の技能レベルの総合的な引き上げを図れることに大きな意味がある。

和裁の仕事は分業が少なく、基本的に一人で一つの製品を仕立てるため、様々な製品を仕立てるカリキュラムを順次こなしていくことにより、幅広い和裁技能の習得を図っていく必要がある。研究所においても、在籍年次に応じて仕立てる製品の難易度を上げながら、様々な製品の仕立てを経験させている。

こうした段階的なカリキュラムをこなしていく過程で、若年技能者それぞれのレベルにあったコンクールや検定試験に参加することで、その段階で学ぶべき技能を短期間で集中して研鑽できる。訓練の中で競技会等の対策を特別に行っているわけではないが、大会採点者が審査する際にチェックすると想定されるポイントを指導者が示し、弱点の反復練習を行うことで、高度な技能を必要とする裕や付け下げなどの仕立ても効率的に習得できるようになっている。

若年技能者は、競技会等という明確な目標を持って技能研鑽を積むことで、漫然と製品を仕立てるよりも、自分の技能レベルで最も研鑽が必要となる要素を常に意識して訓練に臨むことができる。また、何を以て良い仕立てと評価されるのかを具体的に示されることで、製品の善し悪しを見る目を養い、それを実現するために自分に課された課題が何かを常に意識することができる。訓練においては、課題レベルが明白な競技会は絶好の機会となる。

また、競技会においては、競技時間があらかじめ決められた中での仕立てとなり、如何に効率的な段取りを組んで時間管理をするか、限られた時間内で少しでも出来栄を良くするにはどう工夫すべきか、ミスやトラブルが発生した際にどのように対処すべきかを常に考えて競技に臨む。この経験は、日々製品を仕立てていく際にも大きな財産となる。

さらに、出場者のスキルアップにとどまらず、指導者が製品評価や指導方法のノウハウを蓄積することができ、研究所全体の活性化につながっている。

選手は大会の競技前と競技後で、精神面や技能面で大きく成長してくる。またそれを期待している。



(有) 足立和裁研究所
足立 ヨシ子 先生



(有) 足立和裁研究所
足立 善紀 先生



第 51 回技能五輪全国大会
金賞 鳥山 理津子さん



第 51 回技能五輪全国大会
敢闘賞 村田 緑さん

卷 末 資 料

公表**第51回技能五輪全国大会「和裁」職種競技課題**

次の注意事項及び仕様に従って、女子用あわせ長着を仕立てなさい。

1 競技時間 9時間

2 注意事項

- (1) **統一材料を使用し、仕立て寸法規定に従うこと。**
- (2) **コテ釜・コテ（2本使用可）を持参すること。**
- (3) 使用工具等は、「使用工具等一覧表」で指定したもの以外は、使用してはならない。ただし、障害者の場合は、障害の程度に応じて、当該障害者が必要とする工具等の使用を認めるものとする。
- (4) 競技中は、工具等の貸し借りを禁止する。
- (5) 競技開始前に、針に糸を通してはならない。
- (6) 作品をたたみ上げた時点をもって作業終了とするので、作業を終了したものは、その旨競技委員に申し出ること。
- (7) 競技終了時間になった旨を知らされた場合は、直ちに作業をやめ、競技委員の指示に従うこと。
- (8) 作業時の服装等は、作業に適したものであること。

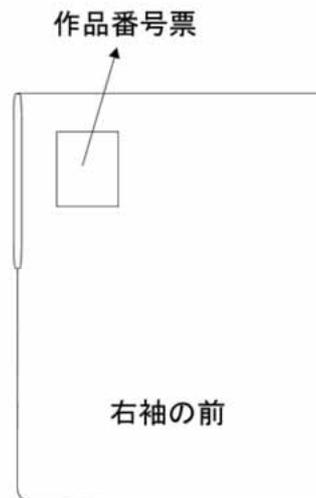
3 仕 様

| | |
|--------|--------------|
| ・仕立て寸法 | 身丈・・・背から4尺2寸 |
| | 袖丈・・・1尺3寸 |
| | 衿・・・1尺7寸5分 |
| | 袖巾・・・9寸 |
| | 袖付・・・6寸 |
| | 袖口・・・6寸 |
| | 後巾・・・8寸 |
| | 前巾・・・6寸5分 |
| | 抱巾・・・6寸5分 |
| | 衿巾・・・4寸 |
| | 合襖巾・・・3寸8分 |
| | 繰越・・・5分 |
| | 襖下・・・2尺1寸 |

その他の寸法は標準寸法に準ずる

- (1) **前加工(ガード加工)はしないこと**
- (2) **すべての箇所についての幅のしるし付け(へら・チャコ等)、折りはしてきてはいけ
ない。ただし、表、裏のおくみのしるしはしてきてよい。**
- (3) 事前に縫い上げておく箇所は、次のとおりとする。
右そで。えり先布と裏おくみのこはぎ。裏は胴裏、裾回し(八掛け)胴はぎま
で。(胴裏の背縫いは自由とする)
- (4) 競技会場で行うものは、次のとおりとする。
左そでと表身ごろ、裏身ごろ前幅のしるし付け(へら付け)をし、おくみ付け
から仕上がりまで。
- (5) えりは、表裏別縫いとし、えり先は本止めとすること。ただし、えり先縫い代
を表裏のおくみではさむ。
- (6) 共えりは、別がけとする。ただし、くけは束ぐけでもよい。
- (7) そで口布は、回しがけとする。
- (8) 共えり及びつま下(えり下)のしつけは、してきてはならない。
- (9) しつけの種類は自由とする。
- (10) 三つえり芯の長さは8寸(30cm)以内とする。
- (11) 競技終了後のおもしはしてはいけない。

- (12) 作品番号票は、下図に示す位置に取れないように縫い付けること。ただし、縫い付ける時間は競技時間外とする。



公表**第51回技能五輪全国大会「和裁」職種持参工具等一覧表**

選手が持参するもの。（数量欄の数字は、特にことわりのない限り選手1人当たりの数量を示す。）

| 区分 | 品名 | 規格 | 数量 | 備考 |
|----|-----------|-----------------|------|-------------------------------|
| 材 | 表地 | 事前に配付した材料を持参のこと | 1枚分 | 仕様どおりに事前に裁断縫製したもの |
| | 裏地 | 事前に配付した材料を持参のこと | 1枚分 | 仕様どおりに事前に裁断縫製したもの（通し裏は使用できない） |
| 料 | 三つえり芯 | | 適宜 | |
| | すそ芯又はふきわた | | 適宜 | |
| | 糸 | | 適宜 | |
| 工具 | コテ釜 | | 1台 | |
| | コテ（2本使用可） | | 1、2本 | |

注意 その他、必要だと思われる裁縫用具一式を各自持参すること。ただし、アイロン（ベビーアイロンを含む）、霧吹き等他人に迷惑をかける恐れのあるものの持込みは禁止する。
裁ち板の足台の高さは15cmないし25cmである。

公表**第51回技能五輪全国大会「和裁」職種設備基準**

競技会場に準備してあるもの。

| 品名 | 規格 | 数量 | 備考 |
|-------|------------|-------|----|
| 裁ち板 | 180×45×4.2 | 1枚/1人 | |
| 作品番号票 | 10cm×5cm | 1枚/1人 | |
| 座布団 | | 1枚/1人 | |
| 手元ライト | | 1台/1人 | |

公表

第51回技能五輪全国大会「和裁」職種採点基準概要

1. 採点項目等

| 採点項目 | | 配点 |
|------|------|-----|
| 製品採点 | 仕様誤り | 100 |
| | できばえ | |

2. 採点項目別着眼点

- 袖口・口下・丸み
- 袖丈・袖巾・振り
- 袖付け・身八つ口・裾のつりあい
- 表・裏直線縫い 身巾のつり合い
- 身頃の立てとじ かぶり
- つま・裾ぶき
- つま下
- 表衿つけ・共衿つけ
- 裏衿つけ・衿とじ
- 衿くけ・衿先
- コテ光り、焼けこげ、しみ、入針 等

3. 採点方法

(1) 減点法式

(2) 未完成品は採点しない。(競技時間内に完成した作品のみ採点。)

